

vivo

水戸芸術館音楽部(ヴォーヴォ)

9&10

SEPTEMBER / OCTOBER
2007

CONTENTS

ブーレーズの肖像	1
ミリヤム・コンツェン	
無伴奏ヴァイオリン・リサイタル	2
マリオ・ブルネロ	
無伴奏チェロ・リサイタル	3
映画「ロストロポーヴィチ 人生の音楽」	4
SELF PORTRAIT おひる会合編	4
最近の公演から	5
インフォメーション	6



写真上:ピエール・ブーレーズ ルツェルン・フェスティバル・アカデミー(2005)より Photo:Priska Ketterer
下・左:ミリヤム・コンツェン 下・右:マリオ・ブルネロ

ブーレーズの音楽(その2) 20世紀音楽の金字塔、そして自由な円熟の境地 9 / 14(金)ブーレーズの肖像

vivo紙上でもたびたびご紹介しております「ブーレーズの肖像」公演。いよいよ開催日が近づいてきました!現代の音楽作品にはあまり馴染みが無いという方も、この公演で新しい音楽との出会いを体験していただきたいと思っています。音楽学者・評論家の白石美雪さんによる鑑賞の手引きとなるお話を挟みながら演奏会を進行しますので、たとえ事前の知識がまったく無くても何の心配もありません。好奇心の赴くままに、どうぞコンサートホールにお越しください。

20世紀音楽の金字塔 ル・マルトール・サン・メートル

演奏会の前半に取り上げるのが、かつてストラヴィンスキーが「今の新しい時代の中で真に価値ある唯一の作品」と評した、20世紀音楽の金字塔とも言えるル・マルトール・サン・メートルです。前号のvivo紙上でご紹介した通り、ブーレーズは1950年代初頭に全面的セリー(音列)音楽とよばれる新しい作曲技法の確立に大きな役割を果たしました。しかしこの方法は、強度に数理的な合理性をもつ一方、そこから生み出される表現は規格的となってしまうなどの欠点を持つことが明らかになっていきます。この没个性的なセリー音楽から離脱し、ブーレーズが恐ろしいほどの研ぎ澄まされた感性で、それまでには存在し得なかった未知の領域を切り拓いた、奇蹟とも呼べる作品がル・マルトール・サン・メートルです。ブーレーズ自身はこの作品について、次のように語っています。

「ル・マルトール・サン・メートルは、1953年から55年にかけて、すなわち厳格な音列主義(セリアリズム)を抜け出し、もっと普遍的で柔軟な法則を音響的な諸現象のヒエラルキーに見出そうとしていた時期に作曲された。」20世紀音楽の金字塔とも言える作品を、是非、お聴きください!!

限り無く自由に書かれた「今」の音楽 シュル・アンシーズ

さて、演奏会の後半に演奏されるのは、ブーレーズの最近の作品であるシュル・アンシーズです。本作品について、ブーレーズ自身は、「一定の音楽言語の基礎を探究していた55年(ル・マルトール・サン・メートルの作曲年)においてよりも、書法は限りなく自由に、一層饒舌になっている。」と語っています。戦後の新しい価値の創出という闘争から解放され、純粋に音楽の創作へと向かい始めたブーレーズの「今」の創作を代表する作品です。また、3台のピアノ、3台のハーブ、3群の打楽器というように、キリスト教の三位一体など「完全なるもの」をあらわす「3」という数字を基盤としており、構成的な美しさが魅力の一つとなっています。ブーレーズという天才作曲家が到達した、自由闊達な境地の音楽を、どうぞお楽しみください。

ブーレーズからのメッセージ

残念ながらブーレーズ氏本人は高齢のため、今回の来日は実現できませんでした。しかし、昨年

のルツェルン・フェスティバルの期間中に、筆者は、音楽学者の笠羽映子氏の協力を得て、ブーレーズ氏が水戸の聴衆に向けて贈ったビデオ・メッセージを収録してきました。その全内容は、公演当日の開演前の時間(18:30~18:45頃)に上映する予定ですが、その一部を本紙上でも紹介したいと思います。

ブーレーズ:大変率直に言って、私自身が水戸に行けないことを非常に残念に思っています。けれども、私の誕生日(1925年3月26日)はお分かりでしょう。私は、もはや以前のように、多くの旅行をしなくなっています。...(水戸公演に参加するルツェルンのブーレーズ・アカデミーの演奏家たちについて)私は、勿論、前もって、彼らの演奏を聞きますし、ですからクオリティには自信があります。私という当事者はいないけれど、代理人を介して、当事者は立ち会っているということになりますね。音楽家達は、優れた演奏を行うのに十分だけ、粘り強く巧みに練習を積んでくるでしょう。聴衆の皆さんは彼らの演奏を聞いて満足なさるだろうと思っています。そしてもし、(ルツェルン・アカデミーと)日本との定期的な結びつきが、今後始まるなら、私にとっても大きな喜びです。

ブーレーズ自身が、監修し、その演奏のクオリティに太鼓判を押す、今秋、スイスのルツェルンと水戸でしか聴けないビッグ・プロジェクトです。皆様のご来場をお待ちしております。 《中村》



写真左;ミリヤム・コンツェン
 中;Solo ~ 無伴奏ヴァイオリン・リサイタル BVCE-38040
 今回の演奏曲、J.S.バッハ、イザイ、バルトークが収録されている。
 2004年1月の録音。
 右;ロマンティック・ヴァイオリン・リサイタル OC 596(輸入盤)
 コンツェン最新盤。ブラームス:ヴァイオリン・ソナタ第3番など3曲
 を収録。ピアノは、ヘルベルト・シュツプ。2006年11月録音。国内盤(BVCO-37448)は9月26日発売。

c Tom Specht

コンツェン 熟慮の末の明晰さ BACHのための4人 その3・Clarity(明晰さ) 9 / 28(金)ミリヤム・コンツェン 無伴奏ヴァイオリン・リサイタル

水戸室内管弦楽団との共演

水戸芸術館のお客様にとって、ミリヤム・コンツェンといえば、水戸室内管弦楽団の演奏会に登場したことがある若きヴァイオリンの逸材、といった印象でしょうか。

1976年、ドイツ人の父と日本人の母との間に生まれたコンツェンは、2歳からヴァイオリンを始め、7歳でデトモルト音楽学校に入学、伝説的ヴァイオリニストのティボール・ヴァルガに師事します。その後、数々のコンクールに入場し、95年には名指揮者クラウディオ・アバドに招待され、ベルリン室内楽フェスティバルに出演するなど、着実にキャリアを積み重ねていきます。指揮者のゲルト・アルブレヒトも、10代の彼女の演奏に「全く稀に見る才能」と驚嘆の声をあげたそうです。

そして、2000年11月、コンツェンは水戸室内管弦楽団第44回定期演奏会のソリストに抜擢されます。日本人の母を持つとは言え、活動のほとんどがヨーロッパにおいてであったため、日本では無名に近い状況でした。しかし、私たち水戸芸術館は確固たる自信を持って、あたたかくも厳しい耳を持つ聴衆の皆様へ彼女をご紹介します。演奏されたのは、指揮者をおかないスタイルで、ブルッフのヴァイオリン協奏曲第1番。結果は、大成功でした。一点だけを見つめるような、まっすぐな演奏は、よく知られたブルッフの名作に清冽な光を当て、今作曲されたばかりのような新鮮さを引き出しました。彼女にとっては、親や先生くらいの年齢にあたる多くの水戸室内管弦楽団のベテラン奏者たちも、彼女の演奏を高く評価しました。

幸福な出合いは、必ずや、ほどなくの再会を望みます。2003年6月、水戸室内管弦楽団第54回定期演奏会に再びコンツェンは登場しました。曲は、メンデルスゾーンのヴァイオリン協奏曲(指揮者をおかないスタイル)。曲の持つ伸びやかな楽想になんら逆らうことなく、順風に乗るかの如く自然な弓使いと澄んだ音色で、演奏されつくしたこの曲の「素」の姿を再発見させてくれました。

あの演奏会から4年余、いよいよ待望のリサイタルが実現します。しかも、たった一人でステージに立つ無伴奏リサイタル。コンツェンの魅力を100%味わえる、貴重なリサイタルになりそうです。

直球勝負のプログラム

J.S.バッハをモチーフにコンツェンが考えたプログラムは、なんとともコンツェンらしいというべきか、これ見よがしなところのまったくなく、直球勝負のものです。

まず、バッハの無伴奏ヴァイオリン・パルティータ第3番。ヴァイオリンの旧約聖書にもたとえられる6曲からなる無伴奏ヴァイオリンのためのソナタとパルティータの中から、ガヴオットの旋律でよく知られる第3番が選ばれました。今まで水戸室内管弦楽団との共演で聴かせてきたコンツェンのイメージ=明晰さ(Clarity)に一番ぴったりの曲が、この第3番かも知れません。

次は、19世紀後半から20世紀にかけて活躍した名ヴァイオリニストであり、作曲家のウジェーヌ・イザイの無伴奏ヴァイオリン・ソナタ第4番。シゲティの演奏するバッハの無伴奏ヴァイオリンのためのソナタとパルティータに触発されたイザイが、当時最高の技法を駆使して書き上げたのが、6曲からなる無伴奏ヴァイオリン・ソナタです。バッハが旧約聖書なら、こちらは新約聖書といったところでしょうか。コンツェンは、クライスラーに献呈された第4番を選びました。

3曲目は、クライスラーのレチタティーヴォとスケルツォ・カプリース。実はこの曲、イザイに捧げられています。つまり、2曲目と3曲目が対になっているのです。ウィーン情緒に満ちた甘美なクライスラーのイメージを覆す、重くシリアスな一面が、この曲からはうかがえます。

最後の曲は、バルトークの無伴奏ヴァイオリン・ソナタ。バルトークが晩年、名ヴァイオリニストのメニューインのために書いたこの作品は、バッハ以降、この分野での最高傑作の一つに数えられています。コンツェンの師ティボール・ヴァルガは、バルトークと同郷のハンガリー人で、その音楽を深く愛していたことから、コンツェンにもバルトークの音楽が自然と根付いたのでしょう。コンツェンは「バルトークを弾くと私は有頂天になってしまいます。この響き、このリズムは私を不思議な魅力で惹きつけます」と語っています。

バッハに始まり、バッハの名作に真正面から挑戦する20世紀の作曲家の渾身の力作が2曲このプログラム、はっきり言って、重いです。現代の若手演奏家にしてはめずらしく、内向的で、

孤独を好み、思索と研究に時間をかけ、明晰な回答を得てから演奏に向かうヴァイオリンの逸材コンツェン。そのコンツェンが満を持して挑む、芸術家としての資質がすべて問われるようなこのプログラムに、聴衆であるわれわれも全身全霊をかけてぶつかってみようではありませんか。

《閑根》

コンツェンの発言から

「私は都会から離れたミュンスター地方の古い農家で育ちました。自分に向かって十分に時間を取って思考することが、私は好きです...そこから私が決断する物事には、強さがあります。」

「日本にいる時、いつでも多くのコンサートホールと聴衆の方々の音楽に対する興味の大大きさに驚嘆します。表面的でない、よく考慮されたことが、私に問われます。」

「人は、それぞれ個々の伝統を深く意識することで、より大きく社会全体へ尽くすことができるのではないのでしょうか。所謂マルチ文化の社会では、すべてをただ一括にまとめて、平らにしてしまっています。けれども、本当はもっとずっと複雑な層にあるのだと思います。それぞれの文化を克服してしまふのではなく、その対象をそれとして置いておくべきと思うのです。ひとつの鍋の中にみんな放り込んでしまうことから、人びとはより激しくそれぞれのアイデンティティーを求めることになると思います。その中には暴力でもって...これは危険になるものを含んでいます。」

「あるフェスティバルで、私が何故チャネルのコンサートドレスを着て演奏しないのかと苦情が出ることがあります。カリスマは、外見に気を取られるのではなく、本質への集中から生れるものであると思います。そこに、ある“光”が存在する必要はあります。ある場所に入ったとき、その空間を満たさなくてはいいけません。私は、見せびらかすのではない、自然から発する“光”を保っていきたいと思います。」

[資料提供:(株)日本アーティスト]



写真左;マリオ・ブルネロ
 中;アローン VICC 60301
 カサド:無伴奏チェロ組曲のほか、リゲティ、ソリマなどの無伴奏作品が収録されたアルバム。1999年、2002年の録音。
 右;ルクー / シューベルト VICC 60557
 今年2月の来日公演でも演奏されたルクー:チェロ・ソナタとシューベルト:アルペジオーネ・ソナタを収録。ピアノは、アンドレア・ルケシーニ。2004年1月録音。

ブルネロの心の歌を聴く BACHのための4人 その4・Heart(心) 10 / 6(土)マリオ・ブルネロ 無伴奏チェロ・リサイタル

続く余韻 ある晩の日記から

2月15日、紀尾井ホールで行われた「マリオ・ブルネロ&アンドレア・ルケシーニ デュオ・コンサート」(アリオン音楽財団主催)を聴きに行った。

1曲目は、シューベルト:アルペジオーネ・ソナタ。シューベルトが、チェロとギターの合いの子のような楽器アルペジオーネに託した美しい抒情が、何とも言えない自然さでブルネロのチェロから紡ぎ出される。その前日、芸術館でリサイタルを行ったヴェッセリーナ・カサロヴァの圧倒的な歌唱に完全に染まっていた私の心も、次第に、ゆるやかに、ブルネロのチェロの世界に同調していった。

2曲目は、ブラームス:チェロ・ソナタ第2番。晩年にさしかかったブラームスが、再び青春を取り戻すかのような輝きをみせるこのソナタを、ブルネロは悦びに満ちて弾く。その響きは、どこまでも自由で伸びやかで、まるですべてが開放弦のようだ。ブラームスが憧れた、アルプスの南のまばゆい太陽の光と暖かい空気もたらず開放感を、イタリア出身のこのチェリストは身をもって知っているのだ。

最後の3曲目は、ギョーム・ルクー:チェロ・ソナタへ長調。アリオン音楽財団の小川氏によれば「ヴァンサン・ダンディの補筆完成版もあるが、ブルネロはあえて無念にもルクーの筆が途切れる未完版を選んだ」とのこと。私は初めてこの曲を聴いた。そして、驚いた。18歳の天才作曲家が、思うが俤に筆を走らせたような瑞々しさと、急逝(24歳でこの世を去ってしまう)を暗示するかのような陰鬱さが同居した音楽で、全体で50分ほどかかる大作。ルクーは、ワーグナーの トリスタンとイゾルデ 前奏曲を耳にし、興奮のあまり失神したと伝えられるが、彼のワグネリアンぶりはこのチェロ・ソナタを貫く循環主題の扱いにも深く刻み込まれている。この異様な大作に、ブルネロとアンドレア・ルケシーニ(ピアノ)はまさに没入するように演奏した。それは、「私は自分の音楽の中に己の魂のすべてを投入すべく苦心した」というこの作曲家の信念が、そのまま演奏者に乗り移ってしまったかのようなようだった。第4楽章、あの循環主題が苦悩に満ちた表情で熱く奏でられたところで、突然音楽は止まる。ブルネロもルケシーニも、微動だにしない。

何ともショッキングな終わり方だった。拍手は鳴り始めたものの、会場はあっけにと取られたままだ。

その聴衆の心を優しく癒すように、ブルネロはアンコールでラフマニノフのソナタのカウンタービレを弾いた。そして、今や完全に癒えた聴衆の心とともに、ブルネロは再びドイツ・ロマン派の森へと還るように、シューマンの編曲によるピアノ伴奏付きのバッハ:無伴奏チェロ組曲 第3番のブルーを最後に奏したのだった…。

チェロ最前線

あの演奏会で聴いたブルネロのチェロのあたたかい響きは、いまま心に響いています。その余韻に浸りながら、あらためてブルネロをご紹介します。と思います。

マリオ・ブルネロは、1960年イタリアのヴェネト州カステルフランコ生まれ。アドリアーノ・ベンドラメリとアントニオ・ヤニグロに師事して研鑽を積み、86年には第8回チャイコフスキー国際コンクールで、イタリア人として初めて優勝します。その後、活躍の場は世界各国に。リサイタルはもちろんのこと、協奏曲のソリストとしても引張りだことで、これまでに共演した指揮者を挙げると、小澤征爾、カルロ・マリア・ジュリーニ、クラウディオ・アバド、リッカルド・ムーティ、ダニエレ・ガットィ、ズビン・メータ、ワレリー・ゲルギエフ、ヴォルフガング・サヴァリッシュ、パーヴォ・ヤルヴィ、チョン・ムンフン…と、すごい顔ぶれがざらりと並びます。言うまでもなく、こういう指揮者と共演することは、ソリストが望んで出来ることではなく、指揮者とオーケストラから依頼されて初めて実現することです。したがって、ブルネロがいかに他の一流音楽家から高く評価されているか、お分かりいただけることでしょう。

日本では「東京の夏」音楽祭に頻繁に招かれ、企画性の高い数々の演奏会に出演しているほか、昨年秋のルツェルン・フェスティバル・イン・東京では、ピアノのマウリツィオ・ポリーニとも共演して、話題を呼びました。

Heart(心)の歌

しかし、これだけの評価と名声を得ている働き盛りの40代の演奏家にしてはめずらしく、ブルネロの姿には、スケジュールに追われるような忙しさが感じられません。実は、ブルネロは、いまだに生まれた街に住み、家族との生活を大事にしてい

ます。そして、仕事はきちんとこなしつつも、一方では仕事以外の人生を心から楽しみ、謳歌しているのです。

昨年秋の来日の後には、3人の子ども連れて、家族全員でサハラ砂漠に出かけたブルネロ。「学校で学ぶことも大事だが、時には一緒に旅をしたり、また自分の仕事を見せることも大事」と、良きパパぶりをインタビューで語っていました。

また、今年7月にはこっそり来日し、自ら主催する「チェロ・トレッキング」の一環で、楽器をかついで富士山に登り、山頂で朝日のまぶしい光を浴びながらチェロを演奏しました。自然と音楽を存分に味わい、満面の笑みを浮かべるブルネロの表情が目に見えてくるようです。

ブルネロの演奏を聴いていると、このような人生の豊かさが、すべてそのチェロに流れ込み、味わい深いHeart(心)の歌となってあふれ出すのが感じられます。そして、その深々とした響きは、美しい余韻となって、いつまでも聴く者の心に残るのでしょ。

「シリーズ=バッハのための4人」の最後を飾るブルネロのリサイタル。取り上げる作品は、もちろん、チェロの聖書とも言うべきJ.S.バッハの無伴奏チェロ組曲。中でも深い精神性と厳しさが際立つ 第2番 二短調 と 第5番 八短調 が選ばれました。1本のチェロで奏でられる限られた数の音に、弾き手・聴き手の想像力をつなぎ合わせて、鍵盤音楽にも匹敵する豊かな和声と精巧な対位法を実現した、奇跡のように高く屹立する作品に、ブルネロは新しい血を通わせました。ブルネロは、バロック時代の舞曲に、人間のあらゆる感情を注ぎこみ、心の歌として響かせることで、バッハと現代というかけ離れた時空に、大きな橋をかけるのです。

J.S.バッハに組み合わせられるのは、ガスパル・カサドの無伴奏チェロ組曲。20世紀を代表するスペインの名チェリストだったカサドのこの曲は、チェロの音色と機能を存分に生かしつつ、ノスタルジックな詩情にみちた名作です。たとえば、第2楽章では、軽やかなカタロニアの舞踏のリズムに乗せて、スペインの美しい過去への郷愁が、作曲家の心を通じて情感豊かにつづられます。聴くものを包み込むようなブルネロの優しい音色が、実にしっくりくる作品と言えるでしょう。 《関根》

写真左;あひる会合唱団
副指揮者・菅波ひろみ
右;ムスティスラフ・ロストロポーヴィチ



BACHのための4人 関連企画・特別上映 9 / 20(木)映画『ロストロポーヴィチ 人生の祭典』

「BACHのための4人」シリーズでは、関連企画としてすでに4月に映画『アンナ・マグダレーナ・バッハの日記』の上映を行い、当方の予想を上回る大好評をいただきました。感謝の気持ちを込め、シリーズ後半戦コンツェン&ブルネロ・リサイタルの関連企画として映画『ロストロポーヴィチ 人生の祭典』を上映いたします!今年東京で単館上映され、たいへんな話題を呼んだドキュメンタリーです。水戸公開はこれが初めて。前回の上映同様、NPO法人シネマパンチとの共催企画となります。

さて、ロストロポーヴィチは、今年4月27日に80歳で世を去った20世紀最大のチェリスト。水戸芸術館にも、2度出演していることをご記憶の方も多いでしょう。1990年4月8日と9日、水戸室内管弦楽団の記念すべき第1回定期演奏会に出演し、小澤征爾音楽顧問指揮するMCOと共にボッケリーニとハイドンのチェロ協奏曲を圧倒的なスケールで奏でたことは多くの方が記憶されるとこ

ろです。また巨匠は1992年11月4日にリサイタルを行い、バッハの無伴奏チェロ組曲第1番やベートーヴェンのチェロ・ソナタ第3番などに名演を聴かせてくれました。

この映画は、ロストロポーヴィチと、妻である偉大なプリマドンナ、ガリーナ・ヴィシネフスカヤの近況をとらえながら、彼らの人生を通じて激動の20世紀を振り返ろうとするものです。旧ソ連を代表する偉大な音楽家夫婦であったにもかかわらず、反体制作家ソルジェニーツィンをかまくった罪で、ふたりは追放同然で祖国を去り、世界市民として生きる運命となりました。金婚式を向かえ、有名人たちに祝辞を送られるふたり。その華やかな情景を描きながら、映画はふたりの人生がたどった苦難の旅路を振り返っていきます。そこに、ロストロポーヴィチにとって最後の新作初演となったペンデレツキ作品のウィーン初演におけるリハーサル風景がはさみこまれてゆきます。この指揮をしたのは小澤征爾MCO音楽顧問。小澤音楽顧問の

姿や、巨匠との対話風景もたくさん出てきます。このリハーサル風景と、生徒に熱のこもったレッスンをを行うヴィシネフスカヤの姿が交互に映し出されるクライマックスは感動的です。バッハの演奏シーンはないのですが、インタビューの中で、巨匠が考えるバッハ像が示されるのが貴重です。

監督はロシアの鬼オアレクサンドル・ソクーロフ。昨年、終戦前後の昭和天皇の姿を、きわめて深い敬意と洞察をもって描いた傑作『太陽』が日本でも公開され、大評判となったことで記憶される方も多いでしょう(ちなみにこの映画ではロストロポーヴィチが演奏するバッハの無伴奏チェロ組曲が音楽に用いられていました)。20世紀という時代に常に鋭い視線を向け、我々の生きる未来の方向を模索するこの鬼才の手によって、ロストロポーヴィチがどのように描かれるのか。ぜひご期待ください!

《矢澤》

SELF

水戸を代表する合唱団・あひる会合唱団の伝統の重みと底力を感じたい。

9 / 23(日) 第46回 あひる会合唱団 定期演奏会

今年で創立57年、毎年定期演奏会を開催するようになって46回目を迎えることとなりました。現在、団員は高校生から70歳代までの66名、改めてその歴史を辿ってみると、わがことながら本当に凄いものだと思います。

継続することの大切さ、難しさは言うまでもありませんが、50年以上私達をご指導下さっている常任指揮者、鈴木良朝先生をはじめ沢山の方々の温かい心に支えられて今があるのだと感謝の気持ちでいっぱいです。しかし、昨年秋、鈴木先生が体調を崩され、私達は機関車を失った状況で定演を

やらねばならないという大変なことに陥ってしまったのです。副指揮者である私の肩に、ずっしりとし掛かった責任の重さに何度も倒れそうになりながら、何ともしもご来場下さった方々に「聴いて良かった」と思ってもらえる演奏にしなければ……と、団員力を合わせて練習に励んでまいりました。

今回の第1ステージは、木下牧子の作品よりア・カペラの優しい響きを、第2ステージでは“出会い”をテーマに 千の風になって などみなさま良くご存じの名曲を、男声合唱も織り混ぜ素敵な編曲でお届けいたします。玉手箱を覗くような、そんな気持ちで楽しんでいただけましたら……。そしてメインの第3ステージは、現代の代表的な英国の作曲家である John Rutter(ジョン・ラター / 1945 ~ / ロンドン生れ)の作品 MASS of the CHILDREN (子どものミサ)をとりあげました。2003年2月に、ニューヨーク、カーネギーホールで初演され、Rutterらしい美しいメロディーは勿論のこと、オーケストラ、大人の合唱、子どもたちの合唱、ソプラノとバリトンのソロという何ともしも素晴らしい

編成のミサ曲です。少年時代ボーイソプラノとして歌っていた Rutter が「子どもの合唱と大人の合唱が対等に演奏できる曲」とそう考え作曲したと、彼自身がコメントしています。今回は、ソリストに結城滋子さん、清水良一さんをお迎えし、ひたちなか少年少女合唱団、NHK水戸児童合唱団のみなさんの澄んだ歌声とともに、そして小林由佳さんのオルガンによる華麗なる響きなど、十分に楽しんで頂けるものと思っております。

世代を越え、ジャンルを越えて共感できる音楽のすばらしさを改めて感じ、今回も素敵な曲に出会えたことに感謝しております。

是非、ご来場いただき、ご高評価賜りますようお願い申し上げます。

あひる会合唱団副指揮者
菅波ひろみ

最近の公演から
JULY



1



2



3



4



5



6



7

西山まりえチェンバロ・リサイタル(7月14日)
 紅色のドレスに身を包んだ西山まりえがニコニコと舞台上に現れると、それだけで客席は暖かい空気に包まれる。そして、鍵盤を探るように弾き始めるフレスコバルディ:トッカータ第1番が、一気に会場の集中度を高める。言葉にならない感情が深奥から紡ぎだされ、それは即興的な前奏をおいた 100のバルティータ で一気に爆発する。なんという奔放さ、自由さ。引き終えると即座ににこやかな笑顔に戻り、トークをはさみながらハーブ演奏へ。2つの楽器を自由に行き来する彼女の演奏に、客席が魅了されてゆくのがわかる。数々の即興演奏を経てたどり着いたパッハ:半音階的幻想曲とフーガは、まさにパッハが今この瞬間に作曲しているかのようなスリルに満ちた演奏となった。そして、「弾くフラメンコ」というべき白熱のソレル ファンダンゴ で、客席の興奮は頂点に達した。「BACHのための4人 その2・Animation(活気)」は、その副題にふさわしいものとなった。アンコールはA.マルチェッロのオーボエ協奏曲二短調第2楽章のパッハによる鍵盤用編曲。《矢澤》アンケートから 入魂の演奏に言葉ありません! ハーブも凄かったです!(東京都:K.S.さん) バロックのキース・ジャレットが出演したように思った(鎌倉市:Y.Y.さん) 即興演奏はすばらしかったですね。その場のインスピレーションで何かを吐露するかの様な演奏でした(水戸市:R.A.さん) ソレルのファンダンゴ、チェンバロがこんなに生氣+精気あふれる楽器だったとは!(習志野市:Y.O.さん) 宇宙の神秘とか、生命の尊厳とかいうものを感じた気がしました。これほどまでにヨーロッパの音楽が奥深いとは思いませんでした(ひたちなか市:Y.S.さん)

ミト・デラルコ第10回演奏会(7月21日)
 1999年の結成以来、10回目の演奏会を迎えたミト・デラルコ。台風一過のコンサートホールでリハーサルはスタートする。今回はハイドン:弦楽四重奏曲変ロ長調作品50の1、トマジーニ:弦楽四重奏曲変ロ長調、ベートーヴェン:弦楽四重奏曲第5番イ長調という、ハイドンとその弟子2人によるプログラム。このところ、リハーサルは回を重ねるごとに順調さを増し、メンバー間に確実に「共通言語」が形作られてきたのを感じる。19日(木)には水戸市内の中学生・高校生を対象とした公開リハーサルも行い、学生の皆さんにガット弦の響きを楽しんでいただいた。そして演奏会。ハイドンの終楽章の「ある仕掛け」に聴衆の皆さんがみごとに引っかかってくれたことにメンバー大喜び。知られざる佳曲トマジーニの開放的な楽しさを存分に満喫したあとに、

若きベートーヴェンの意欲作を。18世紀と19世紀、音楽が大きく変化してゆく境界線がくっきりと示される演奏会となった。アンコールはハイドン:弦楽四重奏曲へ長調作品77の2 雲が行くまで待とう 第2楽章。《矢澤》アンケートから あふれるような情感の音! 音! 音! ききほれてしまった(行方市:K.S.さん) クラシカル楽器のあたたかみのある音色と演奏は「祈り」にも通じるおもいで聴きました(水戸市:K.I.さん) トマジーニの作品は初めて聞いたがすばらしかった。初めての作曲家の作品にふれるのも楽しい(ひたちなか市:A.F.さん) この10年水戸でコンサートを続けて下さって有難うございます。これからも毎年たのしみにしています(日立市:T.O.さん)

高校生音楽講座2007 第3回(7月26日)
 今回は「音楽の“ジャンル”について考えよう」がテーマ。前半、「クラシック」の成立を、グロケイオの音楽論を元に考察。後半は、「洪さ知らズオーケストラ」公演にちなみジャズ史を概観。洪さ知らズのビデオに盛り上がった高校生たちは、本公演にも足を運んでくれた。詳しくは <http://www.arttowermito.or.jp/blog/yazawa/> をどうぞ。《矢澤》

初見宗郷 尺八リサイタル(7月29日)
 ひたちなか市在住の尺八奏者、初見宗郷さんが「茨城の演奏家による演奏会企画」シリーズに登場し、リサイタルを行った。昨年7月、長年勤めた会社を定年まで3年を残して退職され、念願かなって、「何にも制限されることなく存分に尺八に接することが出来るようになった」と語る初見さん。川瀬白秋さん(胡弓・唄・三絃)をはじめ、福田佑子さん(唄) 中井智弥さん(箏)、小林久子さん(箏)、前田文子さん(17絃)、大須賀佳緒里さん(唄・箏)、山崎扇秋さん(箏)という多くの賛助出演者が華を添え、初見さんの第2の人生の門出を祝うかのようなリサイタルとなった。チケットは早々に完売御礼。多くのお客様がホールにつめかけ、古曲から現代邦楽にいたる初見さんの幅広いレパートリーとその幽玄な尺八の音色に耳をすましていた。《関根》アンケートから 感動のあまり、あっという間の一時でした。ありがとうございました。(東茨城郡城里町:M.Y.さん) 大変素晴らしかったです。尺八の澄んだ音色に酔いしれました。舞台の演出も風情があり、よかったです。(水戸市:H.N.さん) 久しぶりに尺八のすばらしさに感動しました。川瀬先生の胡弓を始めて聴くことができ、すばらしい時間を過ごすことができました。ありがとうございました。(墨田区:S.Y.さん)

